
セックスかバイオレンス、あるいはその両方

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セックスかバイオレンス、あるいはその両方

【Nコード】

N8419A

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

生のドラマが見たいー。学校に興味を失った政吉は、夏休みを利用して、自分を変える冒険に出る。その果てに、凄惨な結末が待っているとも知らずにー。

前編（前書き）

実在の地名が舞台ですが、本作品は完全にフィクションです。また、中編から後編にかけて、若干性的な描写が入っています。あるいは、読者様を不快にさせる要因になる場合があるかもしれませんが、閲覧の際にはご了承ください。

前編

山手線の駅名を全て暗記した十二歳の夏休みに、川田政吉は、初めて電車に一人で乗った。かわだまさち

車窓の風景は時折若干の変化を見せるものの、概ねビルと商店街の連続である。

これなら、家でテレビゲームに興じていた方がましだったかもしれないー。

政吉は、ひどく後悔していた。この計画に打ってでる前までの好奇心や探求心は、急速に彼の中で萎んでいく。

ドアにもたれて、駅構内の売店で購入したばかりの漫画雑誌を読み始めると、それは完全に零へと至る。

所詮、現実の冒険など、空想の世界のスリルには遠く及ばないのか…。

政吉にとって山手線とは、大都会の象徴であった。

東京、新宿、渋谷、原宿、池袋。

一度も足を踏み入れた事がなくとも、それらの地名は、僅か十二年の人生において、幾度となく政吉の耳に入ってきた。テレビを始めとするメディアや、小説によって。

新宿では、日々、国内やアジア諸国のマフィア達が血で血を洗う

抗争に身を投じている。渋谷、原宿では、自分とさして年も変わらぬ少女少女が、時には体売り、時には公園で若さに身を任せたまま、タフな野外生活を送る。池袋では、カラーギャングが服装の違いという理由だけで、日夜喧嘩に明け暮れている。

そんな無法地帯の全てを網羅し走る沿線――。

それが政吉にとっての山手線であつたのだ。今日、実際に乗車を慣行するまでは。

現実とは違う。窓の外で移りゆく景色は、平和そのもので、刺激など皆無。あるいは実際に降り立てば、そのシユール的一端でも味わえるかもしれないと、些細な期待は覚えるものの、どれも決め手に欠けていた。

彼の所有する金銭では、一度でも改札を出してしまうと、あとは帰宅の際に必要な電車賃しか残らない。

何か自分を惹きつける、それこそ刺激的でドラマチックな光景が車窓から垣間見えでもない限り、そんなリスクを背負うのは御免だった。彼が、この冒険に必要な経費を小遣いで貯めるまでには、実に三ヶ月の月日を要したのである。

帰ろう。そうだそれがいい。結局、山手線も俺の夢想到過ぎなかったのだ。

そう思つて、漫画雑誌を肩掛け鞆の中に放ると、次の停車駅は上野であつた。

京成線や成田線を経由しつつ、日暮里駅から始まつた山手線――

周の旅が、もう間もなく終わりを告げる。

しかし、上野をでると、車窓の風景ががらりと変わった。

そこかしこに、ラブホテルが点在している。次の駅はー！。

車内に貼ってある沿線図を見るまでもなく、政吉は駅名を思い出す。

鶯谷だ。

政吉はドアの窓にペタリとくつついて、ラブホテル一つ一つを瞳の奥に焼き付ける。

そうだ、バイオレンスが駄目なら、セックスでもいいー！。

このようにして、政吉は鶯谷駅に降り立った。時刻は、午後三時を十分ほど過ぎた頃である。

改札を出ると、すぐ左に薬局店が見える。

なる程、ここで皆避妊具を購入するのかー！。

実際は大体のラブホテルにコンドームが備え付けられているものだが、無論政吉にそのような予備知識はなかった。

さて、と政吉は思う。

自分を変える第一歩は、ここから始まる。後は、ここで何をするのか、だ。

初めての精通を迎えてから自慰を覚えるまでに、それ程時間のかからなかった政吉である。セックスに対する興味は尽きない。

だからといって、いきなりセックス自体を目的にする程、政吉も無謀では無かった。何と言っても十二歳。自分がいかに社会的な弱者であるかは心得ている。彼はただ、見たかったのだ。ブラウン管やパソコンのディスプレイを通してではなく、肉眼で直接、想像を超えるドラマに巡り合いたかったー。

何故か？

政吉はある日を境に、不登校となった。理由は政吉にとっても不明瞭である。友人がいけない訳でも、明白なイジメが存在した訳でもなかった。ただ、急に行きたくなくなっただけだ。

小学校低学年の頃から、不条理な扱いをクラスメイトから受け、何度か稚拙な殴り合いの喧嘩をして、自分が正しいのにも関わらず、一度も勝てた試しがないからかもしれない。女子児童に「政吉君て女の子にもてないよね」と何度か小馬鹿にされたからかもしれない。とにかく、政吉は学校というものに興味がなくなってしまったのだ。

そして、その不明瞭な理由を模索している内に、ある事に気が付く。

俺の人生は敗北にまみれているのではないかー。

それは端的に言ってしまうと、喧嘩に勝てない、女性にもてないという二通りの、極めて主観的な敗北に過ぎないのであるが、少年である政吉にとって、絶対的かつ普遍的な敗北に思えた。

このままでは俺の人生はつまらない。

政吉は面白いものについて探求した。具体的には、バイオレンスとセックスについての物語である。

テレビ、漫画、小説、インターネットにおいて、リアリティのあるそれを探す際には、物語であるにせよ、実在の地名が舞台として使われているものをピックアップする。政吉にとって、未知の世界が広がっていた。

そして、その舞台に大体において山手線が走っている事実感動した。

面白いものを直に見れば、俺が失った学校に対する興味を取り戻せるのではないか。俺自身が、物語の主役になれるチャンスがあるのではないか。俺自身にも、勝利が訪れる日が来るのではないかい。

妄想と現実の狭間に答えを探しながら、夏休みという、小学生が昼間に歩いていてもなんら問題のない期間を利用して、彼は鷺谷に立っている。

ホテル街を歩いてみた。

休憩三千八百円

宿泊七千五百円

などという表記がそこら中に見受けられた。

このように高い金銭を払ってまで、大人達はセックスしたがるのか――。

鷺谷におけるホテルの利用平均値段は、都内でも安価である方なのだが、少年である政吉にとっては驚嘆に値する程の高額であった。

つまり、ホテルを利用しなければならない理由がある筈なのだ。恐らくドラマはそこにある――。

時々、ホテルから出てくる若い男女を見つける事があった。しかし《若い男女》がホテルを利用するのは、親の目を気にする結果である事くらい政吉にも解る。そこにドラマは有り得ない。

要は、不釣り合いなカップルを探しているのである。

例えば、親子程に年の離れたカップルや、あからさまに片方の合意が見えないにも関わらず、無理矢理ホテルに入ろうとするカップル。

そういうものにこそドラマは存在する筈だ――。

そう思って歩き回るものの、見当たりはしなかった。ホテル街に挟まれてひっそりと存在する公園のベンチに座りながら、政吉は失望にうなだれていた。

やはり、もう帰るべきなのか。日は暮れ、べたついた空気が政吉を一層不快にさせる。

そうだ、帰ろう。そもそも、いざそういうカップルを見つけた所で、生のセックスなどどうやって見れると言うのだ――。

自分の浅はかさに嘆きつつ、政吉は重い腰を上げる。

公園を出て、駅の方面に歩こうとする。

「ちょっと、あんた」

唐突に背後から掛けられた声に、思わずギクリと身を硬直させる。

ゆっくり振り返ると、そこには褐色の肌を黒のキャミソールで包んだ三十代前半と思われる女性が立っている。

「さつきから、こんな所をウロウロして何やってんのさ、あんたみたいな子供が」

女性の日本語のイントネーションは若干辿々しいものの、概ね流暢と言って差し支えない。

政吉は言葉を失った。外界とのコミュニケーションを廃絶して久しい政吉にとって、得体の知れない女性との会話など、宇宙人との遭遇に等しい混乱がある。

「何にせよ、あんたみたいな子供が夜に一人でフラフラする場所じゃないよ。早いとこ帰りな」

言われなくとも、そうするつもりだった。しかし、これはチャンスでないだろうか。この未知との遭遇が、あるいは俺の転機に繋がるのではないか。だとすれば――。

千載一遇のチャンスを、みすみす逃してなるものか！

政吉は高鳴る鼓動を必死に抑えつけながら、体中の筋肉をほぐし、何とか声帯を震わせる事に成功した。

「あの…」

「何さ」

「あなたは、これからセックスをしますか？」

女性は一瞬目を丸くして、次の瞬間には吹き出していた。

中編

六畳一間の質素な部屋であった。小さな机に小さなテレビ。小さな箆笥に小さな冷蔵庫。あるものはみな、すべからく小さい。

褐色の女性に連れられて、政吉はこのアパートにやって来た。ホテル街からは歩いて十分かからなかった。

「適当に座んな」

女性にそう言われたものの、政吉はこの事態に戸惑いを隠せない。左の耳から右の耳へ、言葉は彼方に消えてしまった。立ち尽くし、呆然と部屋を眺め続ける。

「ちょっと、聞いているの？」

女性に肩を叩かれて、ようやく我に返る事が出来た。

俺は生まれて初めて、何らかしらのドラマに参加しつつあるー！。

大いなる収穫だと思われた。まさかあの質問が、このような結果をもたらすとは。

『あんな、セックスがしたいの？』

『いえ、見たいんです』

『はあ？何故？』

『見てみたいからです』

『それ、理由になってないね』

『でも見てみたいんです』

『お金は？』

『あまり持っていないですが、少しは』

『いくらある？』

『千五百円です』

『話にならないね。それに親の金だろ』

『はい』

『あんたが自分で稼いだ金なら考えなくもないけど、それだったら出直してきな。何をするにも、金は自分で稼ぐものさ』

『自分で稼いでいたら、セックスを見せてくれたんですか？』

『まあ、考えた程度だけどさ』

『それなら、相当する労働を与えてください。それをこなしたら見せてくれますよね？』

『やれやれ、あんたみたいなスケベな子供がいるから、この国は駄目になっていくんじゃないの？まあ、でも、どうしてもって言うな』

ら、ついておいでよー』

ついてきた。

これからどんな労働を課せられるのだろう、その果てにどんなセックスを見れるのだろう、そこにはどんなドラマがあるのだろうー。

政吉は高揚していた。

女性は名前をリエと名乗った。職業上の名前だった。本名は名乗らなかった。

リエは出稼ぎに日本へとやって来た外国人だ。日本に来れば、金が稼げると思っていたらしい。

稼げなかった。日本に行くために密入国組織に借金をし、密入国組織に売春機関を紹介され娼婦になる。稼いだ金は仲介料として七割が消え、残りで借金を払う。

「私は故郷に残した家族を少しでも楽させようとこの国に来たんだけどさ、そんな事もままならないよ。稼ぐどころか、借金が増えただけさ」

皮肉に笑いながら、政吉にリエはそう言った。

「ま、こんな話をしても仕方ないね。あんたにはこれから仕事をしてもらおう。セックスが見たいと言っていたけど、ちようどいいかもしれないね。あんたの仕事は正にそれさ」

願ってもいない言葉だった。セックスを觀賞するのが労働ならば、

それもまた一つのドラマに繋がる。

「いいかい。私の店は派遣型なんだ。子供のあんたに解るかどうかわからないけれど、簡単に言えば店に客から電話がかかってきて、店は待ち合わせ場所を指定する。それで私が出向いていく寸法さ。ただ、客に気に入られれば、個人的に仕事をもらえる事がある。もちろん店には内緒でね。そうすればお金は全部私の懐に入る。今日の仕事は、個人的の部類に入る方だ」

政吉にもその言葉の意味するところは理解出来た。

「その客は、まあいわゆるサディストでね。私、生意気そうな顔をしているだろ？そういう私をいたぶるのがその客にはたままないらしくてさ、えらく気に入られたよ。」

ある時、そいつは私に、子供はいないか、と尋ねてきたんだ。いるけど、日本には連れてきていない、と答えた。

もし子供の前でヤラせてくれれば、三倍の金を払うとそいつは言っていたよ。子供の前で犯されるのは最高の屈辱だからって付け加えてね。下卑た野郎さ。ま、それでも商売さね。金になるんなら私はどんな事でもするよ。さすがに自分の子供は無理でも、あんたなら問題ない。さて、そんな訳だけど、あんた、この仕事を受ける気あるかい？」

酷く蒸し暑かった。この部屋にエアコンが設置されていない事が原因なのか、それともリエの言葉が耳から体内に熱を発生させたからなのか、政吉には解らなかった。

「はい」

と政吉は答える。一辺の躊躇もない、キツパリとした声で。

「その返事、覚悟もキチンと伴っているだろうね？」

果たして、どのような覚悟が必要なのか、政吉には理解出来なかったが、ひとまず首を縦に振る。

リエは政吉を、小さなラブホテルに案内した。外観は古く、所々に汚れが見えた。個人的な仕事の際に、よくここを利用するらしい。少し多めの賃金を払えば、従業員は室内で起こった出来事には関知しないそうだ。殺人でも起こらない限りは。

政吉はリエと共に中へ入った。機械的にいらっしやいませという声が流れる。

たくさんのパネルに、室内の写真が表示されていた。リエは303号室のボタンを押す。パネルの横の小さな窓から鍵が出てきた。リエはそれを受け取ると、仕事、と呟いて、一万円札を無造作に投げ出す。

エレベーターで三階へ。303号室の扉を開けた。

異質な匂いが政吉の鼻をつく。それは政吉が嗅いだ事のない匂いであつた。股間が疼いている事に気付く。

この匂いは何だ？何故俺の性欲はこんなにも膨れあがっているー？

政吉の想像とは大分異なる内装だった。ラブホテルと言えば、ピンクの薄暗い照明で鏡ばりの部屋で、ウォーターベッドなんだろうと思っていたが、部屋は明るく、鏡もなかった。ベッドはセミダブル

で、白い小さな机と、黒いソファーだけが目についた。

「適当に座りな。十分くらいしたら客が来る」

政吉はソファーに腰掛けた。心臓が高鳴る。

ついに、俺の目の前でドラマが展開する。しかも、俺自身が登場人物となって――。

リエは煙草を取り出して、一本吸い、机に置かれた鉄製の四角い灰皿に捨てると、おもむろに服を脱ぎ始める。

目を疑った。まだ客は来ていないのに、何故？まさか、俺と――。

妄想が頭の中で暴走する。

下着だけの姿となったりエの肉体は、恐ろしく妖艶であつた。大きな胸に、くびれた腰。足は見事な曲線を描いている。褐色の肌に、純白の下着がやけに眩しい。

「何馬鹿みたいに口を開けてるのさ。あんたと何かする気はないよ。勘違いなさんな」

そう言うとりエは手提げ鞆を探り、何かを取り出した。

何か――赤い首輪だつた。それを自ら首に装着する。

「これはその客に貰ったものさ。そいつの仕事の際には、必ず付けるように言われてる」

それは政吉に、ある種の支配を思わせた。多分それは運命という種類の支配なのだろう。リエはこの首輪を通して、リエ自身の運命に支配されている。確信に近い閃きであった。

これは何を意味するのだろう。このドラマにおいて、俺は何をするべきだろうー！。

政吉が思案を巡らせてから数分後、ドアを叩く音が聞こえた。

後編

男は、控えめに言つて醜惡であつた。

五十を幾つか過ぎた頃であらうか。禿げあがつた頭部。額に滲みでた脂汗。点々とした無精髭。どこまでも突き出る肥えた腹。

背広を着込んだその出で立ちはサラリーマンを思わせる。

男は政吉を一瞥すると、リエに向かって下品な笑みを投げかけた。

「へえ、どこでこんなガキ手に入れたんだ」

「成り行きよ。どう？満足した？」

「ああ。いいよ。俺の倅と同じくらいの年頃だろう。こいつの目の前で、いつも以上にズタボロにしてやるさ」

「その前に、お金」

「解つてるよ」

男は内ポケットから財布を取り出すと、その中から一万円札を十枚摘んでリエに渡した。

リエはそれを自分の財布に丁寧にしまうと、ベッドの上に腰を降ろした。

「さあ、ケツをあげてうつ伏せになれ。坊主、お前はベッドの前に

立つて、リエを見続けるんだ。絶対に目をそらすんじゃないぞ」

政吉は言われた通りに、立ち上がってベッドに寄った。男は乱暴に服を脱ぎ捨てると、ブリーフだけの姿となって、ズボンからベルトを外した。男の半裸はその醜悪さをさらに助長させている。

リエはうつ伏せのまま、顔だけ上げて政吉を見ていた。

次の瞬間、乾いた音と共に、リエの表情が歪んだ。

男が、リエの尻を皮のベルトで叩いている。渾身の力を込めて。

室内に流れる有線のBGMを、リエの悲鳴がかき消した。

男は高らかに笑って、鞭に見立てたそのベルトを幾度もリエの尻に叩きつける。

これは何だ？何のドラマだ？一体俺は何を見ているー！。

政吉はリエが苦痛に顔を歪めていく様を、しっかりと見続けた。それは労働を果たす為というよりも、このドラマにどのような意味が込められているかを見極める為に、必要な作業であるように思われたからだった。

政吉とリエはお互いを見続けていた。男はブリーフを降ろして、そり立ったそれを露わにする。

それには、世の中の暴力や邪悪といったものの全てが収められているような、極めて不快なエネルギーが内在しているように、政吉の眼に映った。

男がリエの下着を強引に引きずり降ろす。政吉の角度から性器は見えない。

政吉は見たいと願った。ここでそれが見えないのであれば、全ての行動が意味を失う。

しかし、政吉は動けなかった。

全身の筋肉が硬直している。たつぷりとクーラーが効いた部屋なのに、冷や汗が頬を伝って床に落ちる。

男はそれを挿入する。

政吉は以前、そういつた行為には、それを円滑に行う為の手續きがあると聞いた事があった。その手續きを踏まないと、女性は大きな苦痛を味わう事になると。

男の行為には手續きがないように思われた。そしてそれは正解だった。リエの悲鳴は叫び声に変化して、政吉の耳をつんざいていく。

男は荒い息を立てながら、腰を振り、今度はリエの全身をベルトで打った。

「坊主！しっかり見るお！リエ！どうだ？こんなガキの前で、こんな何も出来ないチビの前で無残にいたぶられる気持ちだよお！」

あはははははは。

男の笑い声とリエの叫び声が混ざる。とてつもなく悪趣味なオペラ

が、政吉の目の前で開演された。

リエは涙を流していた。苦痛によるものなのか屈辱によるもののかは解らない。

セックスとバイオレンス。まさに政吉の望んだ二つの要素が重なり合い、ドラマとして展開されている。

どうした。これが俺の望んだものはずなのに、なぜ、俺はこんなにも苛ついているんだー！

叫び声。笑い声。肉を打つ音。ベッドが揺れる音。

全てが耳障りだった。

政吉は動かなくなった体を奮い立たせる。何故奮い立たせなければならぬかは解らなかった。それでも体に動けと命じる。

あはははははは。

笑い声。黙らせたい。

リエの叫び声。抑えたい。

だから何故だ？何故俺は自らドラマを止めたがるー？

《助けて》

声がした。リエの声にも聞こえるし、自分自身の声にも聞こえた。

記憶が刹那に逆流した。学校。クラスメイトとの喧嘩。女子児童からの蔑み。失われた興味――。

俺の興味を奪ったのは、誰なんだ？俺を殴った連中か、俺を馬鹿にしたクソ女か――。

どれも正しく、どれも間違っていた。

天恵の如く、唐突に答えが政吉の元に舞い降りた。

そうか、俺は抗えないという事に気付いてしまったのだ。この世界の不条理が織りなす不平等に。俺自身の弱さに。俺はそれを拒否する為に、自ら興味を失う事で俺自身を庇護していたのか――。

何て皮肉な話だろう。俺はせっかく自分が守ろうとしたものを、再び自ら傷付けようとしていたのか――。

痛めつけられるリエの姿に、政吉は自分を投影した。

この世界の不条理を作り出しているのは誰なんだ？――目の前のその男だ。

《助けて》

リエが俺に助けを求めている。俺が俺に助けを求めている。

目の前の男が、この世界の不条理だ――。

政吉の中で、元々大きくなかった一つ一つの敗北が、男が生み出した不条理によって抑えがたい程巨大なものに変換されていた。

俺はこの男に負け続けていたのだ――。

《助けて》

このドラマの本質は、俺がリエと俺自身を救う事にあつたのだ。俺がこの男に勝利する事にあつたのだ――。

あはははははは。

男はリエを叩く。リエの体は痣だらけになっていた。

体よ動け――動いた。

政吉は灰皿を手取る。

「おい、ガキ、目をそらすな」

男の声――無視した。

男に向かい、走る。

ベッドに足を掛け、跳んだ。

男にぶつかる。

セックスに集中していた男の反応が僅かに遅れた。灰皿を額に全力で叩きつける。男がよろめく。叩きつける。血が額で汗と混じる。リエがやめなさいと言う。叩きつける。男が抵抗した。叩きつける。男が抵抗をやめた。叩きつける叩きつける叩きつける。ベッドが血に染まる。男が動かなくなった。叩きつける。

リエに体を引っ張られ、政吉はようやく叩きつけるのをやめた。

「何て事するの!」

リエは怒っていたー何故怒っている？

「死んじやったじゃない。どうすんの、どうすんのよ！」

リエは政吉の肩を掴んでまくし立てた。

「だって、助けを求めていたでしょう？」

「誰がそんなもん求めるのよ！仕事でやってるの！金の為にやってんのよ！どうすんの、これ、どうすんのよ！」

政吉はよく解らなかった。せつかくの勝利が興醒めしていく。

「あんた、私の人生どうしてくれんの？あんたが捕まんのはいいけど、これじゃ私だって逃げられないじゃないよ！」

リエは何を言っている？何故喜ばないんだ？

「あんたのせいで、何もかもがおしまいよ」

リエの呪詛が、政吉を混乱させる。

これがドラマの結末か？俺の勝利を、お前の勝利を、何故お前は祝福しないー？

「殺してやる」

リエの手が、政吉の首を締め出した。薄れゆく景色の中で、政吉は男の血がこびりついた灰皿を握りしめ、リエに対する自身の勝利と、

ハッピーエンドを想像した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8419a/>

セックスかバイオレンス、あるいはその両方

2010年10月17日03時13分発行